

小児がんの治療は進歩してきましたが、エビデンスが少なく治療法が未確立のがん腫もあり、平成25年には小児がん拠点病院15施設の指定により診療体制の強化が図られ、AYA世代のがん患者の治療管理の問題や小児期発症のがん患者の成人移行、長期フォローアップの課題等への対応が求められています。平成30年の第3期がん対策推進基本計画では様々な課題に対応する医療従事者の研修等が明記され、小児がんを専門とする看護師への期待も高まっています。

看護師は入院中のみならず退院後地域で生活する子どもや家族も視野に入れ、子どもや家族が安心して安全に生活するために、多職種とともにケアを推進していくことが求められています。

日本小児がん看護学会では「小児がん看護ケアガイドライン」を2008年、2012年と改訂してきました。今回の改訂のための全国調査の結果では、入院環境や看護の現状と課題が明らかになり、小児看護専門看護師など専門性をもつ看護師の存在が病棟のケアの実践に影響し、人的環境要因が看護ケアに関係していました。これらの結果や文献等を踏まえ「小児がん看護ケアガイドライン2018」へと改訂しました。2018年版には、新たに「抗がん剤暴露対策」「AYA世代のがん患者へのケア」の章を追加し、最終章には「ケアモデル」として、5事例の小児がんの子どもと家族へのケアを具体的に記述しました。

「小児がん看護ケアガイドライン2018」の基本的な考え方

1) 子どもと家族のQOLの向上に寄与するわが国の小児がん看護の標準化を目指す。

小児がんをもつ子どもと家族のQOLの向上を目的とし、小児がんの子どものQOL（子どもの生活の自由さ、そのらしさの尊重等）の向上に寄与する必要最小限の制限や、子ども・家族中心ケアを推進するための具体策と、現状における標準的ケアおよび子どもや家族にとってより望ましいとされるケアを明記する。

2) 小児がん看護の専門的なケアが実践されるためのよりどころとなる指針を明示する。

小児の発達の視点や倫理的な視点に基づいた子どもと家族への基本的なケアを基盤に、疾患の重大さに基づいた特別なニーズを把握しケアを実践するための専門的なケアの指針についてわかりやすく記載する。知識と意欲を高められるよう看護師を支援する。

3) 小児がん医療の概説と子どもや家族のニーズに沿った小児がん看護の指針を明示する。

小児がん治療やケアの経験の少ない施設においても標準的なケアが実践されるように、小児がん医療の現状を概説し、子どもや家族のニーズに沿った小児がん看護の指針を明示する。

日本小児がん看護学会ケア検討委員会

本研究は、日本小児がん看護学会のケア検討委員会の研究活動として、平成26-30年度科学研究費補助金基盤研究(B)「小児がん看護の標準化を目指した『ガイドライン』の臨床活用の検討とケアモデルの開発」(研究代表者:内田雅代)の助成金により作成しました。